堀口大學全集

補卷

小澤書店

堀口大學全集　補巻2
昭和五十九年六月二十日印刷
昭和五十九年六月三十日發行

著者　堀口大學
發行者　長谷川郁夫
發行所　小澤書店
東京都千代田區富士見二―五―十二
電話（東京）二六三―九二一八（代）
印刷　精興社
製本　大口製本
製函　日東工業
定價八五〇〇圓

© M. Horiguchi, 1984　Printed in Japan

凡例

一、本全集は、堀口大學の全業績を、詩、短歌、譯詩、評論、隨想、飜譯作品（小說・戲曲・評論）等の各分野に亙って、原則として既刊の單行本を中心に編纂したものである。

*

一、本卷（補卷2）は飜譯作品Ⅱとし、堀口大學が自ら飜譯・編纂した飜譯短篇アンソロジーの全てと、他に飜譯短篇集三點を採錄した。

一、本卷本文の內容については、まず飜譯短篇アンソロジー三點、『詩人のナプキン』、『花賣り娘』、『毛蟲の舞踏會』を基本とし、先行する二點『水色の目』、『聖母の曲藝師』は、『詩人のナプキン』と重複しない作品のみを「拾遺」で補った。またこれらの單行本に準ずる飜譯短篇集として『現代ブラジル文學代表作選』を、またその他の飜譯短篇集の中から、初期の『シャルル・ルヰ・フィリップ短篇集』と晩年の『乳房考』（『乳房雜考』、『乳房抄』、『乳房新抄』の三點を併合）を採錄した。

一、本卷本文は、これらの作品がわが國の近代文學史にもたらした役割と業績を尊重し、すべてそれぞれの單行本初版を底本として使用した。

一、本卷に採錄した作品で各單行本間で重複している作品は、本文中に表題のみを揭げ、本文は省略した。

一、本卷に採錄した單行本の後版等に附されている「あとがき」等については、すべて卷末の解題に資料として揭出した。

一、本卷本文の漢字假名遣等は、原則として底本通りとしたが、正字舊假名遣の本文は、次のような場合に限って訂正した。

1　誤字・誤植と判斷されたもの。

〔例〕倚子→椅子、作著→作者、葛籐→葛藤、菫→董、潑剌→潑剌、葡萄牙→葡萄牙、等。

2　假名遣・ルビの誤り（但し、用ひる、及び音便に關する表記は底本通りとした）。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

〔例〕しまう→しまふ、しやうと→しようと、とうとう→たうとう、渇く→渇く、等。

3　脱字・或いは送り假名の過不足で不自然なもの。

〔例〕然〔し〕乍ら、近〔づ〕く、若〔し〕も、泣〔い〕て、眠〔つ〕て、等。

4　著者の訛用と判斷されたもの。

〔例〕其處へら→其處いら、顫ひて→顫へて、睨めながら→睨みながら、等。

5　前後が轉倒したもの（但し、發表當時の慣用と判斷されたものは底本通りとした）。

イ　訂正したもの。

〔例〕後背→背後、躇躊→躊躇、等。

ロ　訂正せず底本通りとしたもの。

〔例〕爭鬪、賞觀、等。

6　俗字（但し、同字と見做される場合は雙方を竝用した）。

イ　正字に改めたもの。

〔例〕耻→恥、腸→腸、濶→闊、兎→兔、凉→涼、熱→熱、等。

ロ　雙方を竝用したもの。

〔例〕糸＝絲、双＝雙、廻＝廻、虫＝蟲、唇＝脣、等。

一、次のような場合には底本通りとした。

1　底本發表當時の一般的慣用と見做されるもので、誤字・誤植とは判斷できない用法（但し、正しい表記と混用されている場合には、訂正した）。

〔例〕自働車、素的、心よい、音なしい、六ケ敷しい、等。

2　著者獨自の用法。

〔例〕エヴ、中食、すれずれ、一圖に、かかり合ふ、浮み上る、忘れがたない、等。

3　同語の異書體。

〔例〕其處＝其所、飜譯＝翻譯、始＝初、祕＝秘、驅＝駈、寢床＝寢床、じつと＝ぢつと、等。

4　踊り字。

一、新字新假名遣使用の本文で、昨今常用漢字に追加された漢字は、本卷より本文に使用した。

〔例〕遥、扉、癒、棚、等。

一、判讀が極めて困難な漢字・熟語にはルビを付した。

〔例〕秋波、呎、鱸、膃肭臍、椪、等。

一、當時の一般的慣用と見做されるものの中でも、普遍性を缺くと判斷されたものは訂正した。

〔例〕要之→要之に、お可笑しく→可笑しく、不拘→拘らず、一寸と→一寸、等。

一、本文中の會話體の表記はそれぞれの底本によってまちまちであるが、原則として各底本のそれぞれの統一基準に從い、異表記は訂正した。また會話體末尾の句讀點は脱落しているものを補った。

一、本文中の、「　」、『　』に關しては、書名のみに『　』を使用し、他はすべて「　」に統一した。またそれらが缺けている場合は補った。

一、底本に伏字が用いられている箇所は、後版或いは初出形によって〔　〕内に抹消された本文を復元した。

一、底本を訂正出來ない箇所、及び諸々の問題點は、本文の行の右側に〔註〕の記號を付し、校註に記した。

一、以上の處置により、本文と底本との間に異同を生じた場合は、すべて校異に摘記した。

一、卷末の解題には、本卷に採錄した各單行本の全書誌、及び資料として後版の「あとがき」等をすべて採錄し、作品の推移を明瞭にした。

目次

飜譯作品Ⅱ

詩人のナプキン　5
花賣り娘　111
毛蟲の舞踏會　355
拾遺　335
水色の目　337
聖母の曲藝師　397

*

現代ブラジル文學代表作選 411
*
シャルル・ルキ・フィリップ短篇集 585
乳房考 679
作品細目 725
校異・校註 737
解題 763

堀口大學全集 補卷2

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

飜譯作品Ⅱ

詩人のナプキン

佛蘭西短篇小説十一人集

オノレ・シユブラツク滅形

ギイヨオム・アポリネエル

其筋では非常に苦心して探偵したのであつたが、遂にオノレ・シユブラツク滅形事件の不可思議を説明する事が出來ずにしまつた。

オノレ・シユブラツクは私の友人であり、かつ又私は、今度の事件の顚末をよく知つてゐたので、其筋に事件の眞相を報告する事は私の義務であらうと考へた。私の陳述を聞き終つた判事は、今までとは調子を變へて馬鹿らしいほど丁寧なものの云ひやうをするので、私は直ぐに、判事が私を狂人扱にしてゐることに感づいた。

それで私は遠慮なくその事を判事に云つてやつた。すると彼はもつと丁寧になるのだ。さうして私に油斷をさせて置いて、判事は不意に椅子から立ち上りざまに、いきなり私をひつ捕へて戸口の方へ押しやるのだ。見ると今まで室の隅の處に小さくなつて私の陳述を速記してゐた書記までが生意氣にも、立上つて、拳固をかためて、私があばれ出しでもしたら、今にも跳びかからうと身がまへしてゐるのである。

私はもうこの上に無理に言張りはしなかつた。之を要するに、オノレ・シユブラツク滅形事件は、あまりに不思議な事件なので、事件の眞相が反つて出鱈目のやうに見えるのだと思つて諦めた。

シユブラツクが一個の變り者として世間に識られてゐた事は彼の滅形當時の新聞紙によつて報道せられた通りである。彼は夏でも冬でも同じやうに素裸の上に一枚の僧服を着て暮してゐた。はきものはといへば、素足に草履を履いてゐるだけだつた。彼が非常に金持であることを知つてゐる私は、それを不思議なことに思つて彼に何故にこんなにみつともない風體をしてゐるのかとたづねてみた。すると彼は次のやうに答へたものだ。

――これは必要な場合に手取早く裸體になり得る爲めだ。それからまた人間といふものは薄着して出歩くことにも、ぢきに慣れてしまふものなのだ。襯衣やズボン下や靴下や帽子なぞを止すぐらゐは、造作もない事だ。おれなぞは二十五歳の時から、この服裝で暮してゐるのだが、まだ一度も、病氣になつたこともないのだ。」

彼のこれ等の言葉は、私にとつては何の説明にもならなかつたばかりか、かへつて私の好奇心を刺激するのであつた。

――何故に、オノレ・シユブラツクは、そんなに手速く脱

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com